当院眼科での治療のご紹介

眼科部長
中村　春香

当院では新病棟眼科開設時の1998年から現在まで硝子体手術と白内障手術を継続的に行っております。特に硝子体手術に関しては幅広い地域からご紹介をいただいております。白内障手術は近年の患者さんからのニーズにより、日帰り、1泊入院も行っておりますが、2泊3日を基本としております。「入院して手術を安心して受けたい」、「術後の連日の通院が大変」というご高齢の方々、ご家族からの根強い需要があります。2015年の手術の内訳は硝子体手術29件（硝子体手術単独＆硝子体手術＋白内障手術同時施行）、硝子体置換術5件、白内障手術160件、外眼部手術4件です。緊急を要するもの、さらに高度な処置が必要な症例は群馬大学付属病院眼科と連携して治療させていただいております。網膜光凝固術や後発白内障切開術は外来で通院加療可能です。

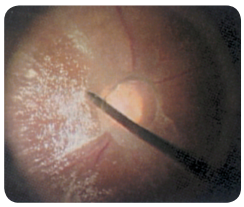
●糖尿病網膜症

国民病である糖尿病の約35％に糖尿病網膜症があると言われています。そのうちの10％は視力低下の恐れのある病態で、糖尿病網膜症は失明につながる病気でありながら、初期には自覚症状がとぼしく、気づかないうちに進行してしまい、症状が出てから眼科受診されたときには手遅れになっていることのある恐ろしい病気です。当科では糖尿病網膜症に対して一貫してレーザー治療、抗VEGF療法（黄斑浮腫に対して）、増殖性糖尿病網膜症にたいする硝子体手術も行える、県内でも数少ない施設です。しかしながら網膜症が軽度か無い状態でコントロールすることが病気の進展阻止にとても大切です。糖尿病患者さんには症状がなくとも定期的に眼科受診を受けていただきたいと思います。当院内分泌内科での教育入院で入院された患者さんには、当科からも糖尿病網膜症の講義スライドで眼科受診の大切さをお話しています。登録医の先生がたからも糖尿病の患者さんの眼科の受診を促してくださるとありがたいです。

●硝子体手術

硝子体手術について解説します。硝子体とは、眼球の中にある透明なゼリー状の組織のことで、その奥に網膜というものを見る神経の膜があります。ものを見る中心部を黄斑と呼びます。網膜疾患には硝子体が関与している病気が多くあり、手術の適応になります。当院で施行されている硝子体手術の対象疾患は下記の通りです。

1. 黄斑円孔（黄斑に穴があき、中心だけ見づらくなる）
2. 増殖糖尿病網膜症
3. 糖尿病黄斑症（黄斑のむくみにより見づらくなる）
4. 黄斑前膜（黄斑に膜がはり、ものが歪む）
5. 硝子体出血、硝子体混濁
6. 網膜静脈分枝閉塞症、網膜中心静脈閉塞症にともなう黄斑浮腫（網膜静脈がつまって出血、むくみを来たす）最近では硝子体注射の適応が多いです。



硝子体の可視化

当院ではすべての器具を従来の20ゲージよりも細い23ゲージのものを使用しています。器具を抜去した後に創口が自然閉鎖し、縫合の必要がない極小切開硝子体手術が施行できるようになりました。術中の眼圧変化や眼球変形が少なく、術後の炎症が低減されます。また術後の異物感も軽減され患者さんにも優しい手術が可能となりました。

2013年度から新型のマルチスキャンレーザー光凝固装置MC-500Vixi（NIDEK）が導入され、従来のものより痛みが軽減できるようになりました。2014年秋からは新型の白内障手術装置が導入されました。

今後も、より安全で患者さんの負担を軽減できる治療を目指していきたいと思います。

●医療体制

現在常勤医1名ですが、この4月から毎週木曜日午前中に前群馬大学眼科学教授（現前橋中央眼科：院長）の岸先生の網膜専門外来を開設いたしました。1人常勤でできることは限られていても、当院の専門性を活かして地域医療に貢献していきたいと思います。